

# だ い あ ろ く

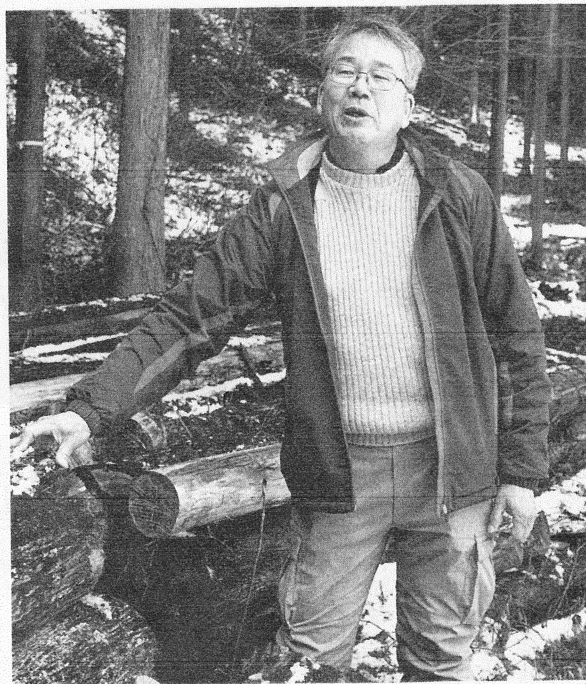
東京彩人記

檜原村で森づくりに携わり30年。NPO法人「フジの森」で事務局を担当する小澤一雄さん(64)は「薪割りとはザクザクの人生」と笑い飛ばす。昨年から村内の広葉樹の里山再生にも手を広げた。事業が終わるのは自分の次の世代だと思っているという小澤さんに、檜原村にひかれる理由や夢を聞いた。

なぜ檜原だったの？  
理運営に関わり始めました。

温泉でも有名な数馬地区 富士写真フィルム(当時)で1984年にコンサルタントとして都民の森のコンペに参加したのがきっかけ。厩戸裏のある古い民家を借り、家族や仲間と毎月泊まりがけで遊びに来るようになった。村の人も一緒にした。檜原で生まれ育っても同世代には厩戸裏は珍しかったようです。89年にオープンした「コテージ「フジの森」の管

## 檜原・NPO法人「フジの森」事務局 小澤 一雄さん(64)



おざわ・かずお 1949年、北海道旭川市生まれ。宇都宮大、東京大大学院で林業や造園を専攻。会社勤務を経て仲間の建築士らと景観を重視する設計事務所を設立。巨木の保存や都市緑化などのパンフレット作製にも携わった。現在は非常勤。

### 里山再生 次の世代へ

「教育の森」用に買収し、当初から指定管理者として枝打ちや間伐の林業体験、自然観察や草木染め、薪を使う料理などを実施しています。森の中に道を作った

「飲食業参入も予定通りですか？」  
「3年前から観光地の払沢の滝に近いレストラン「四季の里」の運営も委託されました。手を挙げるよう勧めました。算も使ってきましたが、森

「林有林の間伐材を用いて作りました。自然関係のさまざまな公募資金を得られるように努力し、都や村の予算も使ってきましたが、森の再生は35畝の村有林「ふるさとの森」が対象です。広さは教育の森の10倍以上。30年以上も人手が入らず、放置されてきた広葉樹林が中心です。市民の力を借りて取り組むつもりですが、自分が生きている間に終わると思っています。次の世代に引き継ぎながら進めていきます。」

#### 記者の一言

コテージから連なる森の入り口には雪が積もり、小動物の足跡が残っていた。ウサギの足跡だという。NPOの森林整備、費用の工面などについて話を聞かされたに思っていたことがある。なぜ古里でもない檜原村にのめり込み、人生の半分を費やすほどになったのかと。小澤さんの熱意があればこそだが、人材を求める周囲とのタイミングが合っていたのだなと感じた。

聞き手/社会部・横井信洋記者